デジタル版
2025年
01月23日号
Vol. 142

成岡マネジメントオフィス事務所通信

NMO OfficeLetter

苦境のユニチカ経営再建なるか！

繊維産業の老舗ユニチカが、昨年度経営再建計画を発表し、金融機関に債権放棄を要請し、官民ファンド「地域経済活性化支援機構」の傘下に入ると発表した。1889年に創業し、繊維産業の名門企業は赤字に陥った繊維事業を切り離し、高収益事業の合成フィルム事業などに経営資源を集中する。祖業の繊維事業まで手放す事態に陥り、今回初めて外部に経営権を委ねることになった。京都府宇治市にある宇治工場はそのまま存続することになっている。

ユニチカ経営陣

＜解説＞ユニチカの歴史は古い。1889年に尼崎紡績として紡績事業をスタート。1918年に摂津紡績と合併し、大日本紡績として日本三大紡績の一角を占めるまでの存在になる。1969年に日本レイヨンと合併しユニチカが発足、合成繊維製造事業に進出。この間、1964年の東京五輪ではニチボー貝塚という会社のチームが主力になり、初めての競技女子バレーボールで金メダルを獲得し、日本中を熱狂させた。その後繊維事業の不振で、2014年にも金融各社に支援を要請。その後も繊維事業の不振から立ち直ることができず、この度の債権放棄、外部への経営権の譲渡となった。現在の経営陣は4月に全員退陣し、経営陣を刷新するという。繊維事業のすそ野は広く、多くの中小企業が外部に事業提携で存在し、破産は影響が大きいとして官民ファンドが経営権を譲受け、再建を図ることとなった。ユニチカはもともと紡績事業から出発した合繊メーカーで、東レ、帝人、旭化成などの合繊メーカーとは、そもそもの出発点が異なる。東レなどのメーカーは、以前から脱繊維事業に取り組み、早々に合繊繊維の製造業からの脱皮を目指し、海外への工場移転や、樹脂製造などへの転換を図ってきた。ユニチカは、繊維事業の不振が大きく、稼ぎ頭のフィルム事業への資金繰りの影響が出始め、今回切り離すことを決断した。京都府宇治市にあるユニチカ宇治工場は閉鎖はせず、他の事業への転換を図り、従業員も社内での異動などで対処する。今後は高付加価値事業の製品を開発し、ガラス繊維などの事業を育て、会社の存続を図る。しかし、繊維事業を取り巻く環境は厳しい。三菱ケミカルは、最近アクリル繊維の製造を中止すると発表した。東レなども、繊維事業の比率は極めて小さい。東レは、東洋レーヨンとう社名から出発し、テイジンは帝国人絹が社名のもとだ。両社とも繊維とは縁遠い会社に変身した。ユニチカの再生がかなうか。まだまだ、価値のある事業は残っているはずだ。業界では評価の高い事業もある。なくすには惜しい企業だ。

ユニチカ宇治工場

東京五輪女子バレー

BUSINESS MANAGEMENT&COORDINATION
株式会社成岡マネジメントオフィス
〒616-8104　京都市右京区太秦下刑部町170
プレサンスロジェ太秦天神川駅前613
TEL:075-366-6611　FAX:075-366-6100　info@nmo.ne.jp

Copyright (C) Naruoka Management Office. All rights reserved.